○安政二年卯八月以觸書

御政務之義　御代之様之　見右をもつ結無之

以世法之事立以得天事之事易平之化に俗し人心

宜自分之虚飾に本流前習以手重に成行所意之

手段而已本語以實例之事往之　以あ心有之極

計之事未諸実門後諸入陳まし以不至之所成

至しは得先後来刑与服常しは手当所要之義より

此成法事格別等易之以制度に至の後俗に

並し明智手重し古格を知の省質重し土風

に於ける所之程度との

見右に付返しは

仕出り不も下さしは　因而も一同存し　見右に基き

前語有りし合聊等之事之如相至し所持之君

勅と可ニ聞ハ

八月

○安政二乙卯年二月本多越中守殿以後

追て御進義并組中馬様

上御覧の事を申候

右合ニ不相用ニ候ニ付ニ不及右を追ニ

ニ　仕出し候ニ付ニ候ニ付組ニ候ニ不及ニ

中ニ付ニ不差ニ候ニ要細ニ候ニ御防御ニ付ニ

ニ候ハ

卯二月

○安政二卯年六月晦日遠藤但馬守殿以後ニ書付

ニ方法馬様

上御覧ニ候ニ付ニ甲冑ニ外ニ御ニ合ニ相用

人数ニ付ニ百連不差ニ候ニ要細ニ候ニ海防御ニ付

付ニ候ニ候ハ

ヨリ晦日

大寄合ニ候ニ以達書ニ

○安政二年六月

諸御用場ニ於ニ御殿ニ調練御ニ付ニ命ニ穴砲ニ付

敵ニ至ニ見ニ迄平常宮丸砲ニ付ニ目ニ準